



TITLE:

「殺夫」論

AUTHOR(S):

津守, 陽

CITATION:

津守, 陽. 「殺夫」論. 中國文學報 1999, 59: 133-161

ISSUE DATE:

1999-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177842>

RIGHT:

『殺夫』論

津 守

陽
京都大學

はじめに

臺灣で現在活躍中の李昂（一九五二）は、次々と大膽な小説を送り出し、常に臺灣全土の話題を集めてきた。近年發表された『迷園』『北港香爐人人插』は共に大膽な性描寫や性と政治の關係を描いたために各方面から大きな反響を呼んだ。しかし、やはり李昂の代表作と言えるのは、一九八二年の『聯合報』に連載され、彼女の名を世界に知らしめることとなった『殺夫』であろう。この作品はドイツをはじめとする歐米各國で翻譯され、日本でも一九九三年に翻譯が出版された。妻が夫を殺すというこのセンセーショナルな小説は、租界時代の上海で實際に起こった事件

『殺夫』論（津守）

に關する記事を元に、臺灣に舞臺を移して書かれ、いわゆるフェミニズム小説として評價された。これを機に、李昂の名はフェミニズム作家の稱號と共に世に廣まった。

ここで簡単に『殺夫』の筋を説明しておきたい。『殺夫』の主人公は林市という女性である。幼くして父を失い、母は飢えのために行きずりの兵士に身を任せ、一族に處刑された。年頃になった林市は、豚肉と交換で屠畜夫の陳江水のもとへ嫁に出される。陳江水は林市に衣食住の安堵を初めて與える一方、毎日のように暴力的な凌辱を加える。林市はその暴力に單純に恐怖して悲鳴を上げ、陳江水はわざと林市に悲鳴を上げさせることで性的満足を得ていた。しかし隣家の姑阿罔官や周邊の女たちの噂話を立ち聞きし、性交の時の悲鳴を笑いものにされているのを知った林市は、二度と悲鳴を上げようとしなくなる。苛ついた陳江水は食物を與えず、さらに屠畜の仕事場に連れていって無理やり豚の解體現場を見せる。飢えと恐怖で錯亂した林市は、夫の屠畜用の刃物を取って寢込んでいる夫を殺して解體するのである。

前述したように『殺夫』は一般的にはフェミニズム文學として高い評價を受けている。『夫殺し』の全編を流れるテーマは、陳江水に代表される男性支配に對する女による復讐であり、また林市を虐げる一方このような男性社會で貧困と差別により自らも虐げられている陳江水の林市による救済であると言えよう。」（藤井省三『臺灣文學の百年』東方書店）、「彼女（李昂）の小説のほとんどは男性中心の世界における女性の社會と性の意識の暗い面に觸れている……この小説は夫を殺す殺人事件を借りて、中國の傳統的な婚姻制度の殘酷さを大膽に暴露した。」（王德威『小説中國』麥田出版）また、最初に翻譯が出版されたドイツで、『殺夫』がどのように評價されたかを知るには、次のエピソードを述べるのみで十分だろう。ドイツ語譯が出た記念に西ドイツを訪れた李昂に對し、あるフェミニストがこう質問したそうである。すなわち、なぜ結末でヒロインは虐待の餘り精神錯亂狀態になった上で夫を殺すのか。ヒロインは自覺して夫を殺し、フェミニズム宣言を語るべきである、と。こうした世間の評價のみならず、李昂自身も『殺

夫』の序でこう述べている。「私はすぐに『妻の夫殺し』という題で、この話をもとに小説を書くとしたが、主人公の母親が強姦される部分を書いたのみで、續けられなかった。……女性問題についてもう一步深く考えを進め、やつと『妻の夫殺し』のために明確な新しい着眼點を得た。つまり『フェミニズム』の小説といえるものを書くことと思ったのだ。」②『夫殺し』を書き始めたときには、女性に對する社會的抑壓とこれに對する女性の抵抗をテーマとしておりました。」③また、先ほど舉げた西ドイツのフェミニストの問いに對しても、「そのような英雄的なフェミニストを描くよりも、長い中國社會の歴史の中で培われてきた女性抑壓の現實、女には最後の抵抗さえ錯亂狀態にならねば許されぬという傳統的中國社會の現實、その中で生きなくてはならない女の悲しみ、人間性を描きたかったから」と答えている。⑤

しかし筆者が『殺夫』から受けた印象は、いわゆるフェミニズム小説としての評價とは大きく異なるものであった。否、もつと正確に述べるとすれば、フェミニズム小説と呼

ばれていることを念頭に置いて讀むと、林市が陳江水を殺す意味が理解し難くなってしまうのである。主題であるはずの夫殺しが、必然性の無いものの様にすら思えてくる。なぜなら、問題の夫殺しの最中、林市には夫を殺しているという意識すら無いからである。彼女はただ、臍氣な意識の中、ひたすら豚を殺しているつもりで夫を殺しているのである。だからこそ彼女は必死になつて陳江水の體を解體する。他人の目には證據隠滅と映るこの行爲も、彼女にとってはその日見たばかりの豚の屠殺を見よう見まねで行っているだけだ。夫をはじめとする男性社會に復讐する行爲としては、實に奇妙な夫殺しだと言わざるを得ない。しかし、實際に陳江水は殺されてしまった。では、この夫殺しはなぜ行われたのか。復讐でないとすれば、一體どのような意味を持つのか。この疑問が、本稿を書くきっかけとなった。またこの林市の意識における不可解な點のみならず、全編を通して、男性社會に抑壓された女性が反逆のために夫を殺すという解釋であつさり片づけてしまうにはおさまらない點が少なくない。見逃してきたこれらの點に

『殺夫』論（津守）

ついて考えるほど、復讐という從來の解釋に飽き足らないものを感じる。本稿は、これらの問題點を提起し、またそれを手がかりとして夫殺しの意味を探ることを目的とするものである。

一 黒い太柱の夢

(1) 夢と幻覺

本稿で舉げたい問題點はそれぞれが密接に關わり合つて、この小説のあちこちに頭をのぞかせている。それを引っぱり出す糸口として、まずは黒い太柱の夢から説き起こすことにしたい。『殺夫』の中には非常に象徴的な場面が多い。中でも思わせぶりで人目を引くのが、「黒い太柱の夢」である。これは林市が初潮を迎えた後に見始める夢で、皆に何遍も語つて聞かせるのだが、以下に夢の内容について本文を引く。

柱を見たことあるでしょう、私が言つてるのは普通の柱じゃなくて、一抱えもあるような大きな柱で、

ちやうど私たちの住んでる祠堂にあるようなあんな柱なの。

續く夢の世界は、以下のようであつた。雲に届くばかりに高くそびえ立つ何本かの大きな柱が、一面墨のような漆黒の中に果てもなく突き立っている。突然、遠くまた近くゴロゴロと雷鳴が響き渡り、續けてドーンと大音響が起くる。火炎が上がるのも見えないのに、柱は瞬く間に皆黒焦げになつてしまふが、それでもまだすつくと立ち續ける。長い時間が過ぎると、深紅の血が、黒焦げになつた柱の裂け目からだんだん滲み出てくる。^⑥

この夢はまた、陳江水を殺す場面で、再び林市の幻覺として微妙に姿を變えて現れる。

それからその吹き上げる血は次第に固まり、さつと變わつて、見る間に一本の深紅の柱が墨色の漆黒の中に突き立っているように見えた。さつと夢を見てるんだ、と林市はごしごし目を擦つた。すると突然、激しい揺れとともに、その柱は眞つ黒焦げになつて倒れ、

深紅の血となつて粉々に四方へ飛び散つた。^⑦

同様に繰り返し柱と血のイメージが語られている。つまりこの小説では、最初と最後に類似したイメージが現れ、それが全體を包んでいる。この夢と幻覺が軸となつて、小説を貫いているのである。そこで本稿も最も重要な夫殺しの場面に現れる柱と血のイメージを説き明かす事を軸として、幾つかの問題點を絡めつつ進めていきたいと思う。

この夢と幻覺のイメージを作者に書かせた直接の誘因は、學生時代に愛讀したフロイト等の心理分析だと思われる。

この夢について、日本語版『夫殺し』の解説では「黒い柱とは、姦通した母が一族のものに縛られる祠堂の太柱に通じるものであり、男根を象徴するものである。そして男性による女性支配の現實を表すものでもあるといえよう。

(…中略…) 太柱の崩壊とは、林市の夫殺しにより女の性の男性支配に對する復讐が成就したことを物語るものである。」と解釋されているが、柱が男根の象徴や祠堂の柱であるとする説明から、男性支配の現實へと直接に結びつけるのは少し安直ではないだろうか。これが本稿で挙げたい

最初の問題點である。本章ではまず、この柱の意味を前後關係から探りたい。

(2) 林市の無知

そもそもこの夢は、林市が初潮を迎えた後に見始めたのだが、林市の初潮に當たつては一騒ぎがあつた。母親を早くに亡くし、鹿城という閉鎖空間の中で、一族からも同性からも白い眼で見られて育つた彼女は、自分の身體に起つた變化を理解することができなかった。

こうした女性の身體の變化は、もともと密やかに母や姉から小さい娘に教えられるものであつたが、林市の初潮は近所の女たちのあいだでほとんど公然たる笑話とされた。女たちは林市があまりに大騒ぎしすぎと思つたのだ。おつ母さんがそばにいないのは知つてゐるから、林市があわててしまつたのはしょうがないが、地べたにひっくり返つて、大聲で血が出てきた、死んじまうわと叫んだのをあざ笑つたのだ。^⑧

例の太柱の夢を見始めるのは、この直後である。そもそも

『殺夫』論（津守）

も彼女の中の何が、このような夢を見させたのだろうか。彼女の人物形象を一言で言い表そうとすると、「無知」、特に「性的な無知」が最も當てはまることに氣づく。林市は終始一貫して性的な事柄に關する知識の缺如した人間として描かれてゐる。初潮の時だけではなく嫁いだ後も、彼女は性行爲についてよく理解してゐるとは言い難い。彼女が性交時に大聲を上げてしまうのは、阿罔官が後に非難するような歡喜の聲ではなく、ひたすら痛みと恐怖のためである。

彼は毎度彼女をいたぶつたが、暗い部屋の中では、林市は彼が一體彼女に何をしているのか分からなかつた。直感的に恥ずかしく、目を見開いて陳江水の動きを確かめる事もできなかった。ただ彼が性急に彼女の股間を塞いでいっぱいになると、押しつけられて息もできなくなり、痛みで我慢できずに大聲で叫んだりうめいたりしてしまう事はわかつてゐた。^⑨

林市には一種の「白癡性」がある。彼女にとつて陳江水の行爲は恐ろしいものではあるが、それ以上のものではな

い。同様に夫との性行爲を苦痛だと感じる女性を描いたものとして遇羅錦の『冬天的童話』を見てみると、夫の行爲をいやらしいものであると感じ、自分の理性に照らして恥すべき事であると考え「私」の感情は、林市と遠く隔たっている。この小説の中で「私たちは性知識については完全に白癡である」^⑩と述べられているのは、むしろ解放以降の教育を受けた世代の女性が、両親や學校から性について何も教えられていない事を指している。これに對して、

林市は近隣の住人が性に關する話題を噂しあう對照的な環境の中で育つた。性知識が缺如しているのは母親を亡くしたためだが、むしろ彼女の精神がそのような状態に置かれている根本的な原因はそこにあるのではなく、本質的にそれを理解する能力や情緒が缺けている存在として描かれている爲ではないかと思われる。本文中に林市の感情や思考を描寫した箇所は、極端に少ない。彼女が何を考えているのかは、陳江水が何を考えているかよりも推し量りにくいものとなっている。『冬天的童話』の「私」は、夫の行爲によって以前から知っていた「接吻」や「結婚」の概念を

汚された感じを抱くが、林市は夫に自らが汚されたとは思えない。ただ、その行爲によってなぜか自らが死ぬことをひたすらに恐れているように見える。

下腹部に痛みを覺えて林市は這い起き、手で觸てみると、ぼたぼたと垂れているのは眞つ赤な血で、褐色のベッドの板の上にも凝固した丸い深紅の血痕があった。(…中略…) 林市は刀から遠く離れた隅まで這つていつて身體を横たえた。下半身の血はまだダラダラ流れているようだった。服についてはいけないのでズボンも穿けずに、ぼんやりと今度こそ本當に死んでしまふ、と考えていた。(…中略…) 下腹部の痛みはもうそれほどひどくはなかった。長年の間、林市は痛みにそれほど構わなくなっていた。我慢していれば過ぎ去ってしまうのだから。しかし、あの何かに塞がれて押し廣げられる感覺は、林市を不安にした。林市は昨夜のことを思い出しておびえた。^⑪

魯迅の『祝福』の祥林嫂が半ば停止した思考の中で死後の世界のことだけをしつこく問うように、林市は彼女の模

糊とした意識の中で、唯一「ダラダラと血を流して死んでしまいかもしれない」という想念だけにとりつかれている。

(3) 柱の意味

夢の話に戻ろう。このように「性的な無知」という性質を持つ林市が初潮の直後に見た夢であることを考えると、當然これは性的な性格を持つ夢であると見ることができるとなれば太い柱は、藤井氏の解釋と同様に男根の象徴と見るのが自然である。林市にとっての男根が、意識的にせよ無意識にせよ、「黒く聳え立つ」恐ろしいものであったことは読みとれるが、柱のもう一つの意味を重ね合わせなければそれ以上の考察を進めることはできない。

そのもう一つの意味は、藤井氏の解釋でも挙げられていた母の姦通の場面である。夢の始まりで、柱は姦通の後母が縛り付けられていた祠堂の太柱のイメージと重ねられている。初潮を迎えたばかりで男性とも交流のない林市が、男根及びそれが象徴する男性について抱き得たイメージは、幼い頃覗き見たこの姦通の場面である。藤井氏は柱が祠堂

の太柱を表していることから、家の體面のために母を犠牲にした男性上位の社會の象徴であるとの解釋を行っているが、母の處刑の場面はそれほど重きを置いて描かれているわけではない。むしろより鮮烈に描かれているのは幼い林市が姦通の最中に出くわす場面であり、その描寫には飢えのためだけでない母の情欲が滲み出ている。柱が祠堂の太柱を表すとすれば、幼い林市の心に残ったものとして描かれているのは、この姦通の場面であると考えた方がよい。

それから林市が押し倒されているお母さんのほうを見ると、母の顔はあのやせ衰えた頬に、鮮やかな赤みと貪婪に輝く表情が現れていた。(：中略：) 林市がお母さんを見ると、柱に縛られた母の衣服は亂れてはいるものの、一か所たりと破れてはいなかった。しかもほかに服がなかったお母さんは、その日上下揃いの赤い新品を來ていた。(：中略：) それはずうっと箱の中にしまわれていたお母さんの花嫁衣装であることを、林市は覚えていた。お母さんが赤い花嫁衣装をまとって一抱えもある祠堂の太柱に縛られている姿、それが

林市の母親に對する最後の記憶であつた。¹²⁾

母親の表情もさることながら、理由があるにせよ、赤い一張羅を着ていたことは、彼女がただ脅されて犯されたのではない事を示唆している。阿岡官が後に「強姦されるのに、一張羅を着込む者がどこにおろるか。」¹³⁾と非難するの、あながち的外れではない。つまり、母親は飢えのためだけに身を任せたのではなく、ある程度の性的快感を覺えていたのである。この箇所について林秀玲氏は「林市の母親が求めていたのは食べる欲求だけで、性的な欲求ではな」¹⁴⁾く、「貪婪な欲情」や「鮮やかな赤み」は、「性的な満足とは無關係である」としている。これはいささか合理的に過ぎる解釋ではないだろうか。同氏の言う通り、確かに母親はその時「本當にお腹がすいてしょうがなくて、それからどうなるかなんてわからなかった」¹⁵⁾。しかし、これは果たして文面通りに食欲を満たしているだけだと解釋するべきだろうか。

母は口に握り飯をくわえ、手にも一つつかんでいた。白い飯を思い切り詰め込んだ口からは、母がウーウー

アーアーと聲を立てるにつれ、咀嚼された白い米粒が唾液と混ざってぼたぼた滴り、片頬をいっぱい濡らし、さらに首や襟にまで流れた。¹⁶⁾

實は、このあたりの表現は以下に擧げる林市の初夜の場面に酷似している。意圖的に兩方の場面が重ね合わされていると考えて良い。

靜かになつて、林市がほとんど氣を失いそうになると、陳江水は手慣れた様子で、急いで林市の口に酒を流し込んだ。むせ込んで林市は氣がついたが、まだ臍臍としていて、依然としてお腹が空いたと喚いていた。陳江水は部屋に行つて皮と油の付いた豚肉の大きな塊を取つてくると、林市の口いっぱいに詰め込んだ。林市が口いっぱい豚肉を噛んで、キーキーと聲を立てると、油が口の端から溢れ出て、ダラダラと顎や首に流れ、油でベトベトになった。この時、涙も初めて目元から溢れ出して、髪が生え際まで達し、ふと寒氣がした。¹⁷⁾

性交中に食物を口いっぱいに頬張らせる陳江水の行爲は、

別に林市がお腹が空いたと言ったためばかりではない。ロジェ・カイヨワが『神話と人間』で明らかにしたように、食欲と性欲の間には密接な関係があるのだ。陳江水は林市に無理やり食物を頬張らせ、その苦しむ姿を見て性的快感を覺えているのである。同様に、母親が口いっぱい米を頬張っている描寫も、食欲のために犯されたあわれな母親像よりは、むしろその行爲の性的な匂いを強調する方向に働いていると見るべきである。

その姿を見て、幼い林市の心に刻みつけられたのはどんなイメージであつたのだろうか。母を縛り付けた親戚一同への怒りか、それとも母を手込めにした兵隊への怒りか。いや、幼い林市にとって、見知らぬ男性と母との行爲は、未知のものでありながら祕密めいた性の匂いを漂わせていたはずだ。そして母が浮かべていた表情は不可解なものとして印象づけられたであろう。この兵隊の姿は、母に未知の行爲を行う恐怖の対象であると同時に、母に恍惚の表情を浮かべさせる不思議な存在として林市の心に残った。

この記憶を彷彿とさせる柱が、彼女にとってどういう意

【殺夫】論（津守）

味を持っていたのか。それは、黒く聳え立つ男根が象徴するどこか恐ろしい男性像ではあるが、その男性というものは母に恍惚の表情を浮かべさせる行爲を行う存在でもあることを示している。この時点で夢が示唆する性行爲の影に林市がどのような認識を抱いていたか、また母の表情や赤い一張羅の意味を林市が理解できたか、それを作品中から直接伺い知ることはできない。しかし夢になって繰り返し現れ、夫殺しの場面でも同じイメージが現れた事を考えると、性的に無知な林市の心にも強烈な印象を與えた事は確かである。

二 豚と血、食欲

夢から幻覺に移る中で最もはつきりと變化しているのは、柱が崩壊すること、及び滲み出るだけだった血が四方に飛び散ることである。本稿で次に挙げたいのは、この血に關する問題である。この小説の中で、最も多く登場する言葉は「血」ではないかと思われるほど、血は至る所からみ、滲み、溢れている。そして全てが同じ意味を持つ血ではな

く、それぞれ異なつた姿と異なつた意味を持つ。しかし共通しているのは、それらがしばしば豚と共にあることだ。豚と血が現れる場面は、主に二つに分けることができる。一つは豚の屠殺の場面であり、もう一つはその豚が食卓の上に登場する場面である。豚と血、この二つは小説の随所で大きな存在感を誇示しているのにも関わらず、なぜかあまり注目を受けていない。本章ではそれぞれの豚と血の姿を考察する。

(1) 豚殺しの陳

豚と血のイメージを最も鮮烈に身にまといているのは、陳江水である。職業自體「豚殺し」である彼は、自身も豚のような人物として描かれている。背が低く肥っていて、「豚眼」と言われる細く小さな眼が顔面の肉の中に埋没している。また、職業柄彼は始終血にまみれているわけだが、血に對して獨特の感情を抱いている。先ずその例として挙げられるのが、屠殺の場面である。彼は豚を殺す時、ある種の氣の充實を覺えている。屠畜臺の上で豚が鳴き喚くと、

性交の時と同じ様な快感を味わうのだ。

これこそ陳江水の瞬間であつた。鋭い刀が抜かれ、血液が噴き出す、胸に抱くのは至高の満足感、まるで高速の衝撃で、體内を駆けめぐる一筋の熱い流れが、白く濃く粘っこい粘液と化して、女の暗く奥深いところに噴射するかのよう。陳江水にとって、爆發的に噴き出す血液と精液は、ほとんど同じような快感をもたらしてくれるのだ。^⑩

陳江水は娼婦との性行爲の時には、女の風流や若さなどは「女が押し倒されて、大股をおつ開くのにはとても及ばず、そのうえ、思うさま泣き喚いて絶叫してくれば言うことなし」^⑪と思つている。彼が「豚殺しの陳」と呼ばれるのは、彼が屠夫である爲ばかりでなく、娼婦に豚が殺されるような悲鳴を上げさせるのを好んだ爲である。彼が林市に加える凌辱は、ただの支配的な暴力にも見えて、實際は彼がその暴力的行爲によつて性的快感を得るためのものである。また、陳江水が阿岡官の首吊りを助けた後、性急に林市を求める様子からは、明らかに日常の中の「死」に觸

れかけたことで興奮していることが見て取れる。

陳江水のその必死に彼女を求める様子が林市をおのかせ、さらに阿岡官の首に荒縄の掛かった様がありありと目の中に焼き付いていて、林市はどこからくるのかわからないような力で力一杯抵抗し始めた。嘔み付き、引つ掻き、兩足でばたばた蹴飛ばしたが、かえって陳江水を面白がらせるばかりであった。彼はこのつ、くそつと罵りながら、遊びのように林市の攻撃を受け止めていた。^⑪

陳江水は豚を殺すときに嘔き出す血、凌辱されて豚のように泣きわめく女、そして「死」の匂いに快感や興奮を覚えている。性行爲そのものが死の瞬間に最も近い性質を持つ事が古今東西の作家や學者によつて明らかにされてきた事を考えると、強ち奇異なこととも言えない。

しかし、彼はいつも血によつて興奮するわけではない。逆に彼が血によつて恐怖を覚える箇所が、二つある。一つは林市の月經中に無理に性交したときである。

陳江水は嘔き出してくる生臭く赤い血液を見て、

【殺夫】論（津守）

ベッドの上に點々といいた茶褐色の血の塊をもう一度思い出さずにはいられなかった。言いようのない憤怒と寒々とした恐れで、彼はぶるつと身震いした。女の經血が男にふれると縁起が悪いというこの種の話に氣にしないわけにはいかなかった。特にこのような刃物で血を見ることを生業にしているので、幸先の良いことがなによりも重要だった。^⑫

もう一つは林市が育てていたアヒルの雛を殺してしまい、自分がかつて子持ちの母豚を殺してしまったときの恐怖を回想する場面である。

（雛の鳥かごを上から屠畜用の刀で思い切り突いた後）
陳江水が手を引き出すと、戸の外から射し込んでくる清らかな秋の月の光に照らされて、手のひらから肘まで一面深紅の鮮血にまみれ、まだ固まらない血が腕を上げるのにつれてゆっくりと流れ落ちてくるのが見えた。（…中略…）雛のバラバラの死骸を見て、初めて陳江水の全身に寒氣が走った。どうしてこんなにでたために血肉を切り刻んでしまったのか、豚を殺すときの

一文字の刀の跡とは似ても似つかない、と陳江水は思
い、遙か昔の記憶が頭に蘇ってきた。(…中略…) 天地
の間において母性が生命を育む根源を破壊してしまつ
たことは、陳江水をひどく恐れさせ、幾日か晝も夜も
目の前に現れるのは血塗られ形を成しながら殺された
命ばかりであつた。(…中略…) なおも心中の重苦しい
罪の意識と子を孕んだ母胎にふれただけがれの感覚は拭
えなかつた。^②

鹿城の人々が迷信を非常に氣にするのとは異なり、陳江
水は普段全く幽霊などを氣にしない人物として描かれてい
る。にもかかわらず、ここには陳江水を唯一震え上がらせ
る「血」の姿がある。注目すべきは、ここで描かれている
血は普通の血ではなく、經血及び母胎の血であるというこ
とだ。この二つの血を陳江水は自らが觸れてはならない禁
忌として畏怖している。經血に對する恐怖には縁起擔ぎと
いう理由が明記されてはいる。しかしこの恐怖は同時に、
林市が自分の初潮以後、自らの身體からダラダラと流れ出
す赤褐色の經血に對して抱く恐怖と符合している。また、

母胎は生命の根源であり、男性である陳江水の知るべくも
ない「天地の間」で生命を作り上げている。陳江水が豚を
殺すとき、彼はいつも自分の手で豚を死に導いている。こ
れに對して母胎は今まさに新しい生命を孕んでいる。その
母胎を切り開き、血を流すことは、今まで殺してきた豚及
び豚のように泣き叫ぶ女と同様に、母胎をも凌辱すること
に他ならない。しかし彼にとつて母胎とは、快感をもたら
してくれる「死」とは逆に、不可解で得體の知れない「生
命」を育む場所である。母胎とそこから生まれる生命の血
で、自分の手を汚した時、彼は得體の知れない禁忌に直に
觸れたと感じ、恐怖を覺えるのではないだろうか。

噴射する豚の血液には快感を覺え、經血や母胎の血には
恐怖する。ここから、彼が死に快感を覺え、生命には逆に
恐怖を覺えるという圖式が見て取れる。この中で忘れては
ならないのが、死を象徵する血は、いつも「噴出」する
「鮮血」だという事實である。

(2) 林市と血と飢餓

一方林市も血によってある特定の感情を呼び起こされている。まず前章で述べたように、初潮や性行爲によって自らが流す血に怯え、自分が死んでしまうのではないかという不安にさいなまれる。

林市はベッドの上に横たわって、血を流しているときに犯されるというかつて無い恐怖で、自分はどうすぐ死んでしまうと思った。(…中略…) 陳江水が見ると、身體のあの部分は汚い暗紅色の血に染まり、ベッドの上も女の下半身も鐵錆色の血液と血の塊で染まっていた。⁽²⁴⁾

林市にとって血にまつわるもう一つの恐怖は、食物としての豚にからみつく血である。陳江水が屠場で殺している豚は食用であるから、それは例えば林市の婚禮のご馳走や祭りのお供えとして姿を現す。しかし豚が祭りの日のご馳走であり、林市も初めは食べるのを楽しみにしているにもかかわらず、その描寫はグロテスクで血生臭い。

ところが切つてはじめてわかったのは、一本丸のままの豚足は表皮だけが煮えていて、中はまだ血が滴っているのだ。煮たものの乾かずにいた血は深い褐色をしており、ひどくドロリと濁っていた。林市は目鼻や口耳から流れ出る赤紫の血の色を想い出して、不吉な恐れが再び頭をもたげてきた。(…中略…) 「食わねえんなら、ブン殴るぞ。」陳江水がすごんで脅しつけた。林市はやつと豚の蹄を箸で挟むと口に放り込んだが、何の味も感じられず、もう一度噛むと、ネトリとした膠狀の粘液が口の中に溢れ出て、(…中略…) 林市が顔をしかめて豚足を飲み込む様子が陳江水を興奮させ、彼はよろこんでヘラヘラ笑い轉げると、なおも豚足をかき集め林市の腕に盛った。⁽²⁵⁾

この二つの血の描寫に共通しているのは、暗紅色や褐色の汚れた血であり、ドロリと濁って流れ出してくるという点である。これは陳江水が豚の屠殺を行う場面に登場する「噴出する鮮血」と非常に對照的である。血について陳江水と林市がそれぞれ抱く感情をまとめてみると、陳江水は

噴出する豚の鮮血に快感を、經血と母胎の血に恐怖を覺える。これに對し林市はドロリと流れ出る褐色の經血及び食物の豚の血に恐怖を感じている。

實は林市が見る夢に血が登場するのは、初潮直後の太柱の夢ばかりではない。彼女は嫁いできてから、「晝寢のできるたいそんな身分」になつたが、晝寢の間にしばしば悪夢を見る。その中で食べるものは、いつも食べようとする血をドクドクと流し始める。しかもその血はある時は食卓で見たと同様に豚の切斷面から流れ出し、またある時は以下の例のように、他ならぬ自分や母の體から流れ出す。

夢で自分は肉の鹽辛でさつま芋入りのご飯を食べようとするのに、何も食べないうちから異様に鹽辛くて、口に手をつ突っ込んで引き出そうとすると、血がドクドクと湧き出し、吸つてみるとその血も鹽辛かつた。²⁶

夢でお母さんは紅い服を着ていた。(…中略…) お母さんはもう待ちきれない様子で、手を伸ばして自分のお腹につっこむと、血のぼたぼた滴る腸を掻き出し、死

に物狂いで口に押し込みながら、キーキーと笑い聲をたてて言うのだ。「食べる物がないう、このさつま芋だけなんだよ。」²⁷

夢でも現實でも、林市はいつも飢えてゐる。幼い頃から母と共に飢餓状態にあり、母はそのために兵隊と姦通し、林市と二度と會えなくなつた。林市自身は嫁いだ後陳江水によつて適度の食事を與えられるが、不思議なほど彼女が食事によつて充分満ち足りてゐる場面が見あたらない。いつも彼女は飢餓の恐怖におののいて、それがこの食べる夢に現れてゐるようだ。本當はそれなりの食事を得ているにもかかわらず、夢を見れば食物は血を流し赤紫の舌を以て迫ってくる。そしてとうとう夫を殺すに至るまで彼女の精神を導いたのも、再び彼女を襲つてきた本物の飢餓であつた。しかし林市が直接恐れてゐるのは飢餓による餓死ではない。それよりもお供えのうどんを食べられた首吊り幽霊の恨みや死靈の祟り、そのような存在が飢えた林市の頭に去來し、彼女を恐怖に驅り立てるのである。また、夢の中では豚だけでなく自分や母も鹽辛い血をドクドクと流

し、それを食べる。林市の中で、食卓の豚が流す血と自分の身體から流れる血はほぼ同一視されており、そもその恐怖の根源は彼女のこうした認識にあるようだ。林市の飢餓はもともと比喩上の飢餓ではなく、具體的な食欲に裏打ちされた現實のものであるのに、彼女が陳江水との結婚生活で現實の食事を得ても、飢餓は満たされなかった。恐れる對象も又、飢餓の延長上にあるべき現實の死ではない。彼女にとって死は身體からダラダラと流れ出る赤黒い血によつてもたらされるものであつて、飢餓とは直接に結びついていない。しかし、夢の中で彼女が満足に食べるのを妨げ、惡夢に變えてしまうのもまたこの赤黒い血なのである。このように擧げてくると、自分の身體から流れ出る血、食物の豚から流れ出る血、夢の食べ物から流れ出る血、林市にとつての血はどれも赤黒く流れ出してくる血であるという共通項を持っている。ここでもう一度夢の柱から滲み出てくる深紅の血が幻覺で粉々の血となつて飛び散る事を考えてみると、この變化は本章で擧げた血の描寫とそれぞれきれいに符合していることがわかる。滲み出る深紅の血

『殺犬』論（津守）

は林市の恐れる血に、飛び散る血は陳江水が快感を覺える血に。幻覺の血は豚の屠殺ほど鮮烈に噴出するわけではないが、この時彼女の周りには陳江水の血が充分すぎるほど飛び散っているのだ。

三 夫 殺 し

第一章から第二章にかけて、柱と血が登場する夢と幻覺の意味を辿つて、柱と血それぞれについて再解釋を試みてきた。これらは林市を内部から夫殺しに導く豫兆である。林市の夫殺しとは一體何だったのか。本章では小説の最後にかかる不思議な夫殺しの意味を論じる。

(1) 夫Ⅱ豚、妻Ⅱ豚

再三述べてきた通り、林市が夫を殺す場面はひたすら奇妙な幻覺の連續である。林市には夫を殺しているつもりはない。

背が厚く刃の薄い刀はずしりと重く、林市は兩手でそれを握りしめると、ぐざりと刺した。眞つ暗な中、

突然林市の目の前に閃いたのはあの軍服の男の顔、一筋の傷が眉から下顎にかけて眞つ直ぐ走っている。次に閃いたのは雄叫び暴れる一匹の豚、喉元には斜めに刀が刺さっていて、濃い鮮血がゴボゴボと傷口から絶え間なく噴き出し、全身をピクピク震わせている。どうしてこんなに澤山血が出るの、しかも全然止まらない。(…中略…)きつと夢を見ているのに違ういわ、と林市は想った。屠場で見た時はこんなに澤山血が出ていなかったもの。それなら、腹を開いて見てみよう。この幻覺は原案となった「詹周氏殺夫」には無い。林市の朦朧とした意識に對して、周氏の辯明にはきちんと夫を殺そうとする意識が明記されている。

彼は酔っぱらって歸ってくると、毎晩私を殴り、罵りました。それが終わると、ベッドで豚のように眠ってしまいます。私はいつも彼を豚みたいに殺してしまいたいと思っていました。でもチャンスが無かったのです。昨日、彼は一振りの刀を持って歸ってきて、殺してやる殺してやると罵りました。明け方、彼がぐっ

すり眠っているとき、私はふと彼がこんなに澤山の豚を殺してきたのだから、私が彼を殺しても豚のために仇を討ったことになるのだと思いついたのです。私は長年見習ってきた屠殺のやり方を試してみようと思ひました。⁽²⁾

豚を殺すように夫を殺すという共通點はあるが、林市と周氏の意識は明らかに異なる。周氏と林市の「夫を殺す」「豚を殺す」という意識の違いは、素直に讀めばそれさえも區別の付かぬ林市の錯亂狀態を表し、それによつて最後の抵抗さえ錯亂狀態にならねば許されぬという傳統的中國社會を描き出していることは作者の述べた通りである。しかし林市が「豚を殺している」と思ひこむ夫殺しの場面によつて、「夫殺し」≡「豚殺し」という等式が、原案よりも明確に提示されることとなった。

林市は凌辱されるときに豚のように泣き喚き、陳江水は林市に豚として殺され解體されるのであれば、そこには人間は存在しない。いるのは豚だけである。なぜ豚かという問題は様々な角度から考えることができるし、その意味は

臺灣の風土、民俗上の觀點から詳しく調べればより適切な例を捜すこともできよう。ここでは周達生氏の著書から、豚にまつわる廣東の興味深い習俗を一例としてあげ、この小説における豚の象徴性について考える助けとしたい。周達生氏によれば、廣東では婚禮の際ベッドの白いシーツが赤く染まると、婿の家から嫁の家に「焼猪」か「焼肉」が送られるらしい。この場合豚が處女性性のシンボルとなっているわけだが、處女でない娘の場合、薬で出血させるという工夫を行い、これは「裝猪」と呼ばれたようである。²⁰ 廣東と臺灣では無論同じではないにしても、ここには豚を新婦に見立てるという行爲が見られる。そもそも『殺夫』に豚が登場するのは陳江水の職業ゆえである。舞臺が日本であれば、豚殺しからすぐに社會的差別の背景を感じること可能だろう。しかし『殺夫』において、人物設定から即社會的差別の要素の存在を指摘することは、當を得た評價であるとは言い難い。「豚殺しの陳」と呼ばれる陳江水を社會的被差別者として描かれていると見なし、『殺夫』がその面からも社會の惨い現状を描寫する小説であるとする

『殺夫』論（津守）

分析は、いわゆるフェミニズム小説であるとする評價と同様、小説の深部に目をつぶったものであると言えよう。豚のイメージがこのように小説全般を覆っていることは、この小説を社會派小説として位置づける役割を果たしているわけではない。豚は林市や陳江水そのものであり、そこに負わせた性質は、人間が本來抱えている獸性とも言えるものである。それは「豚のような人間」という穏和な比喩ではなく、人間であるか否かも定かではない豚そのものとしての描寫であるが故に、すでに「最も苛酷な條件下の人間を描いている」などの評價も飽き足りない。その反面、彼らにとって食べる肉として最もお馴染みの動物である豚の姿は、人間か否かも脅かす豚のイメージが、あくまで人間の習俗に基づいて象徴化されていることを思い起こさせてくれる。そしてさらに林市と陳江水の二人が、一方が豚で他方が人間という關係ではなく共に豚に見立てられていることは、彼らが決して相對する存在ではないことを示唆している。

(2) 幻覺の意味、食べる惡夢の終焉

林市は初潮直後から柱の夢で自らの内に、滲み出る深紅の血のイメージを抱いていた。そして嫁いでははずっと、物を食べようとするとガラガラと赤黒い血が流れる惡夢を見続ける。林市にまつわる血はすべて赤黒く流れ出す、或いは滲み出る血であつた。しかし林市はいつもその血を直接目にしているわけではない。すべては夢の中の出來事である。これに對して、陳江水が快感を覺えたり恐れたりする血はどちらも實物で、陳江水はそれらを幻覺や夢のような一種のトランス状態ではなくきつちり目の覺めた状態で認識している。また、陳江水には快感と恐怖の二種類の血があるが、林市にあるのは恐怖のみである。この二つの相違點を、林市が至つた夫殺しの意味を推測するのに必要な材料の一つとすることができ。なぜなら、林市にとつて

の赤黒い恐怖の血は、夫殺しの幻覺において飛び散る鮮血、陳江水の快感の血となるからである。つまり林市はここで初めて、陳江水が得ていた血による快感を得たのだと言え

る。

ここでこのような結論に至るのは、幻覺の柱が崩れ落ち、鮮血となつて飛び散る事のみを根據とするものではない。林市が陳江水を殺した場面の後には、非常に些少だが見逃すべきでない記述がある。

とうとうひと塊ごとに切つてしまい、もう終わりという頃になつて、林市が座り込むと、あの白く冴え冴えとした月光はもう戸口の所まで下がつていた。もうすぐ終わる、そうしたらもう大丈夫、林市はそう思った。この時になつて腹の内にどつと強烈な飢餓が湧き起こり、口の中にも大量の酸っぱい唾が湧き出てきた。刀を放り出し、林市は部屋を這い出て竈の側に行つた。手慣れた様子で火をおこすと、お供えの壇上に並べてある紙人形と紙の衣裳を取つてきて、一つ一つ火にくべ、またお供えのご飯とおかずを取つてきて、かんかん燃えさかる竈の火の側にうずくまると、猛烈な勢いでむさばり食つた。喉元まで詰まるほど食うと、充分お腹いっぱいになつたので、林市は温かい竈にもたれ

て、ぐっすりと夢も見ずに眠りに落ちていった。^④

ここで注目すべき點は二つある。一つは林市が陳江水を殺した後、初めて自分の爲だけに火を起し、料理をあつらえ、満足に食事するということである。嫁いできた日もお腹がいっぱいになって眠り込む描寫があるが、そこでは陳江水の目を盗むようにしてご飯を詰め込んで、残り火のある竈にもたれて眠るのみである。これに對して夫殺しの後は、今まであれほど食べたいと願っていたながら食べるのを恐れていたお供えのご飯とおかずを、たらふく腹に詰め込む。彼女は幼い頃、飢えに驅られてお供えのご飯に手を出したことがあったが、その夜は熱にうなされて青い顔や赤い顔のお化けに苦しめられた。しかし陳江水を殺す途中で、腸から現れたお化けを斬り殺した林市には、その夜お化けは現れない。且つ、眠ればいつも現れた食べる惡夢ももはや林市を襲わず、彼女は「夢も見ないで」ぐっすりと眠る。この惡夢の終焉が、二つ目の點である。夫殺しをする事によって、初めて自分のために料理し、食事し、そして食べる惡夢が終わる。長い間飢餓に苦しめられた林

市だったが、小説の最後のこの場面でやっとそれから逃れることができる。

夫殺しの直接のきっかけとなった出來事に沿って考えを進めていけば、内部からここまで林市を導いた流れを辿ることができる。はじめに、白癡性を持つ林市が初潮直後に見た夢は、柱は性的行爲を暗示し、血は赤黒く滲み出て彼女をおびやかすものであった。彼女が嫁ぐと、血は晝寢の惡夢に現れて變わらず恐怖を與える。そのような結婚生活を續けていた林市が夫殺しに至るきっかけは、阿岡官が近所の女たちに自分の噂話をしているところを立ち聞きした所から始まる。この時から林市の精神は急激に模糊として、ひたすら阿岡官が非難した性交時の聲を出さないように努めるようになる。この時期の林市の意思は、鮮血と意味を同じくする性的な快感を得る方向ではなく、正反對の方向へ向かっていると言える。しかし同時期に阿岡官が自分と陳江水の行爲をのぞき見ていたことを知った林市は、「腹の中がカッと熱くよじれ、血が噴き出すような」感覺を覺えている。最後の轉機は、陳江水に連れられて屠場へ行っ

た時である。屠場に入った林市は最初自分が見ている光景がよく理解できず、夢の中に入ってしまったような印象を受ける。

陳江水は林市を連れて中にはいるとすぐにどこかへ行ってしまい、林市はぼんやりと突っ立って、しばらくの間自分は陳江水が引き入れた夢の中にいて、自分が見ている物は阿岡官が話していた地獄に違いないと本気で信じていた。(…中略…) 柔らかな觸感とずっしりとした重み、まだ熱いその感觸と鼻を打つ生臭さ、林市がはっとこの一切はすべて夢ではないと悟り、眞實に思い至った刹那、やっとあの噴き出す鮮血と長い雄叫びが、比べようのない現實的な意味を以て湧き出してきた。林市が下を向くと、胸の中でまだ蠕動しているかのような腸の一筋が、腕の外へ流れ出てぶら下がっている。⁽²⁾

林市が小説中で實際に鮮血に出會うのは、この場面が最初である。この直後、林市は陳江水の鮮血にまみれた夫殺しを行うのだ。

屠場の場面で錯亂する様子を一見すれば、彼女はこの豚殺しの陰惨な有様を見て氣が觸れ、よく分からないまま夫を殺してしまうように取れる。そのように讀むと、林市にとってきちんと存在していた現實が、地獄繪のような屠場の情景を見ることによって悪夢と變わり、同じく悪夢のような夫殺しを行った、という構圖になるだろう。しかし本當は阿岡官の話を聞いた時點で、林市は性について誤解してしまっていたのである。阿岡官は近所の女たちに貞操を守ることを説いてはいるが、自分自身は親戚の男と密通していたり林市と陳江水の行爲を覗き見ていたり、なかなかに貞女からは程遠い人物である。鹿城の閉鎖性が彼女をそのような人格に育て上げてしまったことは悲劇であるとしても、彼女自身も閉鎖的な社會でそれなりに樂しむ術を會得していた。同様に近所の女たちははしたないことをしてはいけないという建前と、性の樂しみを享受したいという本音を使い分けることも知っていたし、阿岡官の不品行すら公然の祕密とされていたのだ。しかし本音は本音、建て前は建前である。彼女たちがその二つのバランスをうま

く保って作り上げている世界の中に、林市は何も知らずに飛び込んだ。そして表向きははしたない聲を上げるなどもつてのほかだという態度をとらざるを得ない女たちの前で、恥知らずにも泣き喚いたのだ。これが阿岡官と近所の女たちの槍玉に挙げられる原因となった。よって、林市が噂話を立ち聞きてショックを受けたとしても、實は聲を絶對出さないように努める必要は無かった。その時点で、彼女らも陳江水の鮮血を浴びるような性の快感と同じ種類の感覺を知っていたことに氣づいていれば、その後飢餓に苦しむことは無かったのである。

本稿に於ける夫殺しの結論が、そろそろ定まりかけたようだ。林市には初潮直後から人並みに性の意識はあったが、禁忌のような赤黒い血の恐怖によつて、それを知らずに（或いは閉じこめられて）いた。赤黒く滲み出る血は自己の死や死靈を連想させて恐ろしいものでしかなかった。その彼女は噴き出す鮮血の快感を知っている陳江水に嫁いだが、白癡性を持つ林市にとって禁忌は固く、性行爲や凌辱は眼前の恐怖にしか見えなかった。阿岡官の噂話によつて自ら

『殺夫』論（津守）

の苦痛の叫びが愉悅の聲ととられていることを知ると、ますます性的なものを避けようとして、自分の飢餓がそこから來ていることも分からずに、かえつて飢餓に襲われる。しかし屠場で豚の喉から噴き出す鮮血を目の當たりにしたことによつて、はじめて強烈な打撃を受ける。かくて林市はついに禁忌を乗り越える。まずは母を犯した兵隊の顔、そして喉を切り裂かれた豚の姿に性的な暗示を垣間見ながら、陳江水の鮮血を浴び、最終的に飢えを満たして夢も見ずに眠り込む。これが林市の内的世界から見た夫殺しの像である。言うなれば林市が赤黒い血の恐怖に縛られていた期間、夢のようなものであった。悪夢は屠場にあるのではない。夫を殺した血に染まった林市は、むしろ夢の恐怖を抜け出し、食の飢えと性の飢えを満たすのである。

結 び

『殺夫』には先立つシリーズとして、凡そ『殺夫』が發表される一〇年前に書かれた『鹿城故事』という短編集がある。そこに描かれる鹿港は、羅大佑が八三年に「鹿港小

鎮」の歌で描いたような昔ながらの故郷の姿であるが、後に『殺夫』の直接のモデルとなる挿話が隨所に見られる。「水麗」や「舞展」などの主人公である舞踏家の林水麗は、有名になると、「蔡官」の主人公で阿岡官そっくりの蔡官という老婆に「テレビで踊るような女は、踊り子と何が變わるもんかね。」とくさされる。この臺詞は林市の噂話をする女たちの「娘がおつ母さんと同じようにまねするなんて、こういう連中は、「後車路」の賣女どもと違いやしない。」^④という言葉に對應している。また、「蔡官」では洗濯女をして各家のゴシップを熟知している蔡官が、阿岡官と全く同じ臺詞「悪い竹に良い筍はできぬ」によつて林水麗を母親共々容赦なく非難する。そして林水麗自身は、鹿城という閉鎖空間の、古いお屋敷で踊っているときが一番幸福で、神祕的な快感を覚えるものであったと回想している。^⑤これらの人物像が、後の『殺夫』の着想へとつながっていったことは容易に想像できる。しかし、『鹿城故事』にはより主題がわかりやすい姿で描かれている。「蔡官」には篇の最後に「しかし、蔡官の是非の判断や良心が、どれ

だけ鹿城の家庭の紛糾を招き、どれだけ人の心を傷つけ、あまつさえどれだけ人の潔白を汚して人や物事の決裂を引き起こしたのか、数えることはできない。」^⑥という所感じみた一文がつけられている。林水麗の悲しみにしても、林市に比べてより理性的で理解しやすい。最初に述べた「傳統的社會に抑壓される女性の悲しみを描く」というフェミニズムの主題に沿つて小説を書いたとするならば、この『鹿城故事』の方がよりそのような評價にふさわしいものと言えよう。

ここで再び、最初に林市の夫殺しがフェミニズム的行爲として分析される狀況に疑問を覺えた所まで遡つて考える必要がある。『鹿城故事』でわかりやすいフェミニズムの主題を書いた李昂は、一〇年後に『殺夫』を書いた。しかし『殺夫』に至つて豚、血、性などの因習的イメージを加えた結果、元となつた事件とも『鹿城故事』の主題とも異なり、豚に見立てて人間の業を描き出す作品となつた。この變化は李昂自身が序に書いているような「抑壓の告發」から「抑壓狀態の描寫」へなどという、生易しく且つ些細

なものではなく、彼女自身が七〇年代に書いたフェミニズムから八〇年代の新しい性的人間の描寫へ、大きく異なる一步を踏み出したものであった。この二つの作品がどちらも鹿城の郷土に深く根ざした作品として描かれているのは、臺灣郷土文學論争の盛んなりし當時の状況を考え合わせても、非常に興味深い。作者自身の言によれば『鹿城故事』は郷土文學の潮流とは關係がないものとされているが、作者自身にその意識があるかどうかは別として、『鹿城故事』に描かれているのは往々にして郷土文學で最も多く描かれやすい「懐かしい鹿城」スタイルである。一方、『殺夫』に描かれるのは血と豚が性的興奮を誘う世界である。しかしここで誤解すべきでないのは、再三述べたように『殺夫』のこの世界が「林市の暗澹たる悲劇の生涯」を形作っているのではないということだ。この世界こそが、李昂がこの時描き出した鹿城の姿なのである。つまり、先に挙げたフェミニズム的主題のみならず、描き出される臺灣の郷土も、『殺夫』において性格を大きく變化させたと言うことができる。

『殺夫』論（津守）

しかしはじめに述べたように、『殺夫』に對する世間の反應、そして作者自身の言も依然として一〇年前の『鹿城故事』からほとんど變化するところがなかった。この變化について、世間や作者は果たして氣づくことがなかったのか、もしくは氣づかないふりをするを願っているのか。もしそうだとすれば、その背景とするところは何か。當初筆者は「林市はなぜ夫を殺したのか」という疑問によって本稿を書くに至ったが、結論に至って新たにこのような問題を抱えることとなった。この問題を考察するには更に別場が必要となろう。ただ本稿で言えることは、この夫殺しの一つの姿が、世間に激しい衝撃を與えながらも、實はその衝撃の原因をさほど取り沙汰されずに來たということだ。このことは『殺夫』が『鹿城故事』から踏み出した一步が、どのような性質のものであったかを考える手助けとなる。『鹿城故事』で描かれた女たちの姿、及び鹿城の姿には、明らかな小説の目的がある。それは時に明確なフェミニズムの立場をとり、時に郷土愛を描く。女たちの姿、と書いたのは『鹿城故事』にはほとんど男性の描寫が缺け

ているからで、この點陳江水の鮮烈な描寫が印象深い『殺夫』と對照的であり、『鹿城故事』が女を描いたものであることがよく分かる。フェミニズムの立場から描いた閉鎖社會、または閉鎖的でありながらも尙不思議な魅力と哀愁を湛えた郷土、『鹿城故事』で描かれたこの二つの主題は、恐らく讀む者にも共感或いは反感を覺えさせるのに充分な普遍性を持つていた。それは小説の持つ作用によって、讀む者の心に本來の目的であるフェミニズム主題や郷土愛を訴えることができるだろう。しかしそれに比べて『殺夫』のわかりにくさは一體どうしたことか。陳江水と林市、そして阿岡官、このような男女は誰が見たいものでもない。自らの郷土に誰が豚と血にまみれた姿を想像するだろうか。『殺夫』は一體何のために書かれたのか、『夫を殺す』という題名にも関わらず、この小説にはそこから連想できる潘金蓮もないし、哀れにも追いつめられた詹周氏もない。しかし不思議なことにこのあまりに幻想的な世界は異様な現實感の重みを持って讀む者に立ち向かつてきたのである。フェミニズムの目的意識とわかりやすい普遍性を

持った七〇年代の『鹿城故事』から、文字通り血のなま温かさを持った八〇年代の『殺夫』への變化、それは目的の明確な文學、效能的で理解の容易な文學から、人間たちがあまり見たいと望まない様な人間の姿を描いて徒に讀む者の心を悩ませ、いたたまれなくさせる文學への變化であった。そして始まったばかりの頃には男女の二元對立というわかりやすい構圖が意味を持つていたフェミニズムも、時につれ新たな突破口を探さざるを得なくなったことも、容易に想像できることだ。『殺夫』はこの突破口の一つである。それは男―抑壓者―性的能動者―暴力、女―被抑壓者―性的受動者―暴力を被る者、という二元對立の前提以前に、人間は、男女は實はどのような存在であるのかという主題を、息詰まるような現實感を以て描き出すものであった。このような小説が單なる「實驗小説」とされることは少なくないし、また實際李昂の他の作品にも實驗的要素が色濃く感じられる作品もある。しかし『殺夫』は普遍性とその實驗性がギリギリのバランスを保って充分な衝擊を生み、文學作品にあらかたラベルを貼り終わっていた我々を

驚かせたのである。「殺夫」に真正面から向き合うのは、時に耐え難い。そして世間の評價が真正面から向き合うよりも、フェミニズムの主題や潘金蓮との比較という比較的容易な分析に流れがちであったのも、文學に限らず別に珍しいことではないから怪しむに足らない。しかし、八〇年代の小説に對する九〇年代の評価でありながら、このような分析はその實、詹周氏の事件が起こった當時作家たちや世間が行った評價と、ほとんど變化のない状態を呈している。今日は盛んに「性」の問題から當代小説を研究する試みが行われているが、この點に氣づかなければ、わかりやすく扱いやすい「性」的分析に陥る危険性が無いと、果たして言えるだろうか。

註

- ① 幾乎她所有作品都觸及在男性中心世界裏、女性社會及性意識的幽暗面。(中略) 這部小說籍一樁謀殺親夫的血案、大膽暴露了中國傳統婚姻制度的殘酷無情。」(王德威「華麗的世紀末・臺灣・女作家・邊緣文學」『小說中國』麥田出版、一九九三)

- ② 「我立即以「婦人殺夫」為題，著手想以此故事寫個小說」

『殺夫』論(津守)

但寫到主角母親被姦的部分，即無法再寫下去。(中略) 對婦女問題有進一步的思索，才替「婦人殺夫」找到了一個明確的新的著眼點，想寫一個就算是「女性主義」的小說吧！」(李昂「寫在書前」『殺夫』臺北，聯合報出版，一九八三，以下同)

- ③ 李昂著，藤井省三譯「臺灣のフェミニズム文學」——李昂インタビュ「『夫殺し』」東京，寶島社，一九九三

- ④ 李昂著，藤井省三譯「臺灣のフェミニズム文學」——李昂インタビュ「『夫殺し』」東京，寶島社，一九九三

- ⑤ 但し，ここで舉げた作者の見解は一樣に女性の抵抗をテーマとして執筆したことを示しているが，このうちインタビュに答えているものはインタビュアとの會話の場に多少の影響を受けている可能性が否めないこと，また他の講演の場で「フェミニズムを意圖したものではない」という趣旨の發言をしていることなどを考え合わせておく必要がある。

- ⑥ 「你看過柱子吧！我不是說普通柱子，是有一人合抱的大柱子，像我們祠堂有的那種柱子。

接下來的夢境，是幾隻高得直聳入雲的大柱子，直插入一片墨色的漆黑裡不知所終，突然間，一陣雷鳴由遠而近，轟轟直來，接著轟隆一聲大響，不見火焰燃燒，那些柱子片時裡全成焦黑，卻仍直挺挺的挺立在那裡，許久許久，才有濃紅顏色的血，從焦黑的柱子裂縫，逐漸的滲了出來。」(李昂「殺夫」七九頁)

- ⑦ 「而那股上揚噴灑的血逐漸在凝聚，轉換，有霎時看似一截

血紅的柱子，直插入一片墨色的漆黑中。大概是作夢了，林市揉揉眼睛。而後，突然間，伴隨一陣陣猛烈的抽動，那柱子轉爲焦黑倒落，紛紛又化爲濃紅的血四處飛灑。」（李昂『殺夫』一九二頁）

- ⑧「這類女性身體變化，原是隱私中由母、姊教給下面年幼的女孩，林市的來潮在四鄰婦女中造成幾近公開的笑談，婦人們以爲是林市的過度喧嚷。人們體諒林市沒有阿母在身旁，慌張一定難免，但嘲笑林市躺在地上，大聲喊叫：我在流血，我要死了。」（李昂『殺夫』七九頁）

- ⑨「他還每次弄疼她，在那昏暗的房間內，林市無法區分他究竟對她作了些什麼，出於直覺的羞恥，她也不敢睜開眼睛看陳江水確實的舉動，她只知道他緊迫的充塞在她下肢體間，也壓得她透不過氣來，痛楚難抑使得她只有大聲呼叫與呻吟。」（李昂『殺夫』一〇六頁）

- ⑩遇羅錦『冬天的童話』北京，人民文學出版社，一九八五

- ⑪「下肢體的疼痛使林市爬起身來，以手一觸摸，點滴都是鮮紅的血，黑褐色的床板上，也有已凝固的圓形深色血塊，（中略）林市爬到遠遠離開刀的一旁再躺下，下肢體的血似乎仍潺潺滴流著，林市怕沾到衣服不敢穿回衣褲，模糊的想到這次真要死掉了，（中略）下肢體的痛楚已不是十分強烈，這許多年來，林市也不大去珍視疼痛，忍著總就過去，可是那阻塞著什麼的擴張感覺，令林市不安。林市驚恐著想到昨夜。」（李昂『殺夫』八七—九二頁）

- ⑫「然後林市看到被壓的阿母，阿母的那張臉，衰瘦上有著鮮明的紅艷顏色及貪婪的煥發神情。（中略）林市看眼阿母，被綁在柱上的阿母雖然衣衫零亂，卻毫無撕扯的破損，而且阿母顯然由於不再有衣服，那天穿的是一件完整的紅色新衣，（中略）林市記得，那衣服是阿母的嫁衣，一向壓在箱底。阿母一身紅衣被網綁在祠堂一人合抱的大柱子上，是林市對母親的最後一個記憶。」（李昂『殺夫』七六—七八頁）

- ⑬「怕被人強姦就要跑，不跑也會大聲喊，大力掙扎，衣褲多少會撕扯，那有人一身好衣好褲被強姦。」（李昂『殺夫』一六〇—一六一頁）

- ⑭同氏は「衣食住などの生理的な五つの基本需要が満たされなければ、その他の欲求は現れない」という Maslow, A. H. の人格理論を用いてこのような結論に至っている。（李昂『殺夫』中性別角色の相互關係和人格呈現）東海大學中文系『女性主義與中國文學』臺北，里仁書局，一九九七）

- ⑮「那軍服男子拿兩個白飯團給她，她實在太餓了，她不知道會發生什麼。」（李昂『殺夫』七七頁）

- ⑯「阿母嘴裡正啃著一個白飯團，手上還抓著一團。已狠狠的塞滿白飯的嘴巴，隨著阿母唧唧啾啾的出聲，嚼過的白顏色米粒混著口水，滴滴滿半邊面頰，還順勢流到脖子及衣襟。」（李昂『殺夫』七六—七七頁）

- ⑰「待靜止下來，林市幾乎昏死過去，陳江水倒十分老練，忙往林市口中灌酒，被噎著的林市猛醒過來，仍昏昏沈沈的，兀

自只嘆餓。陳江水到廳裡取來一大塊帶皮帶油的豬肉，往林市嘴裡塞，林市滿滿一嘴的嚼豬肉，噉噉吐出聲，肥油還溢出嘴角，串串延滴到下顎，脖子處，油濕膩膩。這時，眼淚也才溢出眼眶，一滾到髮際，方是一陣寒涼。」（李昂『殺夫』八二頁）

⑱ ロジェ・カイヨワ著，久米博譯「神話と世界」『神話と人間』東京，せりか書房，一九八三

⑲ 「這就是陳江水的時刻了，當尖刀抽離，血液冒出，懷藏的是一份至高的滿足，就像在高速衝擊的速度下，將體內奔流的一股熱流，化作白色的濃稠黏液，噴灑入女性陰暗的最深處，對陳江水來說，那飛爆出來的血液與精子，原具有幾近相同的快感作用。」（李昂『殺夫』一三四—一三五頁）

⑳ 「對陳江水來說，過去謂為奇談的文人雅士嫖妓，根本毫無意義，「風月樓」會有怎樣的雅事，絕對不如一個女人被壓在下面，兩腿張開實在，再有要求，最好是能恣意狂叫。」（李昂『殺夫』一三九頁）

㉑ 「陳江水那般拼了命似的需求使林市驚恐，加上阿罔官頸上束著草繩的形狀歷歷侵巨，盪漾魚秧拱積積盜盜風嘖嘖播播淫舄。她咬，抓著陳江水，雙腳並亂踢，可是只換來陳江水更大的興致，他一面連聲幹，幹的咒罵，一面遊戲般的抵擋林市的攻擊。」（李昂『殺夫』一二二頁）

㉒ 「陳江水看著噴灑開來的點滴腥紅血液，不能自己的要一再想到的卻是床板上鐵褐色的點點血塊，無名的憤怒與一種清冷

『殺夫』論（津守）

的恐懼，使陳江水機伶伶的打了個冷顫。絕非不在意女人的經血會觸男人楣頭這種說法，特別幹的是這種刀子見紅的行業，討個好彩頭比什麼都重要，……」（李昂『殺夫』一二三頁）

㉓ 「陳江水這才抽出手，就著門外照射進來清亮的秋月，只見手掌到臂彎間一片濃紅的鮮血，未曾凝固的血緩緩的隨著手臂舉起滴流下來。（中略）看到殘缺不全的鴨仔塊屍身，一陣寒顫才傳遍陳江水全身，怎麼竟會如此紊亂不堪的血肉模糊，全然不似殺豬的刀口整齊劃一，陳江水想，一個久遠前的記憶來到心頭。（中略）那毀及天地間母性孕育生物的本源，使陳江水在極度驚恐中幾日夜中眼前全是那血汗成形卻被殘害的生命。（中略）仍免除不了心中重重的罪愆，及觸及懷胎母體的不潔感覺。」（李昂『殺夫』一七四—一七六頁）

㉔ 「林市仰躺在床上，從未在流血這段時間裡被侵犯的恐懼使她以為自己即將因此死去，（中略）陳江水看到身體那部分染滿汗穢的暗紅色血液，床板上與女人的下肢體也有繡褐色的汗血與血塊。」（李昂『殺夫』一三三頁）

㉕ 「斬開才發現隻豬腳只有表皮煮熟，裡面仍是血水涎滴。煮過未乾的血水是沉沉的褐色，十分濃濁，林市想到七孔流血會有的紫紅的血，不祥的恐懼再度臨上心頭。（中略）「妳不吃，我就揍妳。」陳江水惡狠狠的威脅。林市這才挾起一塊豬蹄放入口中，沒什麼特別味道，再一咬，黏膩的膠狀黏液流滿嘴裡，（中略）林市皺著眉頭吞食豬腳的樣子讓陳江水感到興奮，他樂得嘿嘿狂笑，將更多的豬蹄聚集到林市碗裡，……」（李昂

『殺夫』一三一——一三三頁)

②6 「夢到自己以鹽巴沾番薯籤飯，沒什麼東西吃，但鹹得難受異常，伸手到嘴裡一抓，血水竟不斷湧流出來，吮吮那血也是鹹。」(李昂『殺夫』一〇八頁)

②7 「林市夢到阿母身穿紅衣，(中略)接著阿母顯然不願再等待，將手伸入自己的肚腹，掏出血肉淋漓的一團腸肚，狼命往嘴裡塞，還一面嘖嘖吱吱的笑著說：「我沒有東西吃，只有這一點番薯籤。」(李昂『殺夫』一六八頁)

②8 「寬背薄口的豬刀竟異常沉重，林市以兩手握住，再一刀刺下。黑暗中恍然閃過林市眼前是那軍服男子的臉，一道疤痕從眉眼處直劃到下顎，再一閃是一頭嚎叫掙扎的豬仔，喉口處斜插著一刀豬刀，大股的濃紅鮮血不斷的由缺口處噴湧出，渾身痙攣的顫動著。怎麼竟有這許多血，而且總噴不完。(中略)一定是又作夢了，林市想。看豬灶殺豬並沒這麼多血，那麼，再開膛看看吧！」(李昂『殺夫』一九一——一九三頁)

②9 「他酒醉回來，每夜打罵我。打罵完畢，睡在床上，就像一隻豬，我每次想把他殺了，和殺一隻豬一樣。可是沒有機會。昨天，他帶了一把屠刀回來，他口口聲聲的要殺。到天亮。他睡熟了。我忽然想起他殺了這許多牲口，我殺他也只算替豬報仇。我要試一試我歷年見習的屠宰方法。」(附錄 詹周氏殺夫——錄自陳定山著「春申舊聞」『殺夫』二〇〇頁)

③0 周達生「子ブタの丸焼き」『中國食探檢——食の文化人類學』東京，平凡社，一九九四を參照した。なお，この點につ

いては關西學院大學の成田靜香氏にご指摘いただいた。

③1 「最後看切斬成一塊塊差不多好了，林市坐下來，那白慘慘的月光已褪移向門口，很快就完了，然後就沒事了，林市想。這才肚腹內猛地傳來一陣強烈的飢餓，口中還不斷湧出大量酸水。丟下豬刀，林市爬出房外來到灶邊，熟練的生起一把火，取來供桌上擺放的幾個紙人與紙棠棣，一一在火裡燒了，再端來幾碗祭拜的飯菜，就著熊熊的火光蹲在灶邊猛然吞吃，直吃到喉口擠脹滿東西，肚腹十分飽脹，林市靠著溫暖的灶腳，沈沈的，無夢的熟睡睡了過去。」(李昂『殺夫』一九二——一九三頁)

③2 「陳江水在帶領林市入內後即不見，林市愣愣站著，有片刻真相信自己是陳江水引入的夢中，而她看到的，應該是阿罔官形容的地獄。(中略)柔軟的觸感和沉沉重量，還有溫熱知覺與撲鼻來的悶悶腥氣，林市恍然醒覺這一切都不是夢，在會意到真實的一剎，適才那大股噴湧出來的鮮血與嘶聲長叫，全以無比真實的意義湧聚回來，林市低下頭，看到懷中抱著似乎尚在蠕動的腸子有一長截已流落手臂外，虛空的懸著。」(李昂『殺夫』一八八頁)

③3 「其實，那種在電視上跳舞的女人，和舞女實在沒什麼不同。」(李昂「輯一 假期」『殺夫』)

③4 「女兒跟阿母學看樣，伊這路人，比『後車路』那些狗母生的，又有什麼差別。」(李昂『殺夫』一六〇頁)

③5 「想想這幾十年，舞蹈的確一直佔著最重要地位，但真正懷

著神秘深切狂熱的，恐怕只有在鹿城的那些日子。（中略）很難清楚那陰鬱、邪巫的快感到底由何產生，這許多年來，就只偶爾獨自於陰暗大廳中跳舞的霎時，還可以再感覺到類似當時沁涼的五角紅磚拼成的地面上留給足尖麻冷冷的那種刺激起體內性慾的快慰，卻總缺少參與某種神秘祭典去獻身的精神滿足，偶爾的，林水麗會痛楚的知覺到，自己對那段時間竟有深遠的懷想與眷愛。」（李昂「輯一 水麗」【殺夫】）

③⑥ 「然而，卻從來沒有人計算過，蔡官的是非良心，引發出多少鹿城的家庭糾紛，傷了多少人的心，或甚且，毀了多少人的清白，造成多少人、事上的絕裂。」（李昂「輯一 蔡官」【殺夫】）